西諸合同特集

地域が育てる医学生

医師のタマゴ、奮闘中！（地域包括ケア実習）

宮崎大学医学部５年　三嶋悠佳さん

安心・安全な地域医療体制を確保することは、持続可能な地域づくりのために大切なことです。

このような中、宮崎大学医学部は平成30年10月から『地域包括ケア実習（クリニカルクラークシップⅡ）』を始めました。

この実習は、医学部の学生（5、6年生）が県内各地域に4週間滞在し、さまざまな実習経験を積んでもらうことで、将来地域医療に従事する医師を育てることを目的としています。

医療実習をはじめ、地域医療に関係する他の職種の研修など、地域に根ざしたカリキュラムで医療技術とともに、地域医療の現状について学びます。

今回は、これからの医療を担う医学生たちにスポットを当て、「地域で育てる」、「地域から育てる」をキーワードに、小林市・えびの市・高原町の西諸合同特集として、宮崎大学医学部の吉村学教授に話を伺いました。

県内や西諸の地域医療の現状

西諸地域は人口あたりの医師の人数や高齢化、診療科の偏在など、県内でも特に厳しい状況にある地区の1つです。また県全体を見ても、若い先生が少なく、中堅から高齢の先生が各地域の医療を支えています。若い医師は都市部へ行ってしまう傾向が強いため、どの地域も医師の確保に苦労しているのが現状です。（※表1・2参照）

地域包括ケア実習の目的

この実習では、医師の卵である大学5、6年生が県内7つの医療圏のどこかに4週間滞在して学びます。

地域ごとに病院の数や住民の抱えている問題は違います。一般的な医療実習期間は2週間程度ですが、さらに2週間長くして病院内だけでなく、介護や地域医療に携わる他の業務を学ぶことで、学生が、より実践的な地域医療の実習経験を積むことが目的です。

また、県外出身者はもちろんですが、県内出身者でも生れ育ったまち以外の市町村を知らない・行ったことがない学生が多くいます。そのような中で、いきなり知らない地方の医師として赴任することは難しいでしょう。地域実習という形で、実際に自分の目で地域の実情を実感してもらい、医師とその地域の繋がりを作る。そうすることで、将来その地域で働く可能性のある学生を増やしていきたいと思い、2年ほど準備期間を要して導入した実習制度です。

医師を地域で育てる 地域から育てる

私自身も診療所勤務時代に、研修医が来ることで刺激を受けることがありました。研修先の関係者や地域のみなさんも、未来の医療を担う人材が身近で学んでいることを知って、医学生がいろいろな人との触れ合いを通して、成長する姿を感じていただきたいと思います。その地域で実習することの楽しさを感じてもらえると、医学生の後輩たちにも伝わり、その地域が実習先として希望される好循環になるでしょう。

「医師確保は医療関係者の仕事」と思われがちですが、何より『地域みんなで育てる』という意識が大切です。その地域に関わる医療関係者・行政・住民が一緒になって、みんなで育てるという意識や地域の雰囲気は、きっと医学生たちにも伝わると思います。

また、今の小・中・高校生にも医療の道に興味を持ってもらい、『地域から医師を育てる』という形で、一人でも多くの医師が誕生し、地元で活躍していただくとうれしいです。

自分たちの故郷で安心して暮らすために

地域医療の最終的な目標は、その地域の住民のみなさんが安心して地元で暮らしていける基盤づくりです。自分や家族が安心して仕事や子育てなどの生活をするために医療は大切な柱の一つです。

医師不足問題などの解消のため、多くの関係者がいろいろな取り組みを行っていますが、これで全ての問題が解決するわけではありません。

住民のみなさんも、限りある医療資源（人材、機材）を大切にするなど、それぞれが、自分の立場でできることをしていただくことで、自分たちのまちの医療を守り、育てていって欲しいと願っております。

INTERVIEW

担当教授に話を聞きました

宮崎大学医学部
地域医療・総合診療医学講座
吉村（よしむら） 学（まなぶ） 教授

鹿児島県出身。宮崎医科大学（現宮崎大学医学部）を卒業後、自治医科大学地域医療学教室で地域医療・家庭医療を学ぶ。2015年、宮崎大学の教授に就任し、地域医療問題に取り組む。地域医療・多職種間連携など、全国で講演活動も行っている。

（表1）医師の人数と人口10万人あたり換算人数

（人）

西諸地域	124
（10万対）	167.4
宮崎県	2,613
（10万対）	238.4
国	304,759
（10万対）	251.7

2016年12月31日時点

（表2）県内の年齢別医師数と平均年齢

（人）

区分／年	2004	2008	2014
29歳以下	178	143	159
30歳代	626	547	455
40歳代	790	737	667
50歳代	436	601	779
60歳代	202	264	399
70歳以上	306	310	271
平均年齢	48.5	50.1	51.4

出典：第7次宮崎県医療計画

医学生の１か月

地域包括ケア実習は県内７つの医療圏のいずれかに４週間滞在して、様々なことを学びます。西諸医療圏では、医療機関をはじめ多くの関係機関に協力をいただきながら、地域医療に関連する業務を経験し、知識を深めていきます。

趣味は野球観戦！

三嶋（みしま） 悠佳（はるか） さん
宮崎大学医学部　５年
（宮崎大宮高校出身）
　将来は患者さんが相談しやすい医師、女性の味方になれる医師を目指します！

病理検査

問診・採血

各種会議

実習報告会

手術立ち会い

三嶋さんの研修必携アイテム

実習中は名札、メモ帳、筆記用具のほか聴診器と携帯用医学書も常に持ち歩いています

１か月の実習先
※三嶋さんのケース

第１週	園田病院
	内村病院
	沖内科・小児科
第２週	野尻中央病院
	池井病院
	園田病院
第３週	小林市立病院
	須木診療所
第４週	小林市立病院
	国民健康保険高原病院
	地域包括支援センター
	小林市役所（介護・保健）
	須木中央保育園

INTERVIEW 受け入れ病院に話を聞きました

小林市立病院　院長
徳田（とくだ） 浩喜（こうき） 医師

私たちも医学生と一緒に成長する

　実習を受け入れる側として、医学生と向き合うことで良い効果があると感じています。医療の世界は日進月歩ですので、医学生を指導する立場として常に新しい情報・技術を知っておく必要があります。また、西諸の地域包括ケア実習では、多くの関係機関の協力により、医療や健康に関する幅広い業務を経験できる実習プログラムとなっています。医学生に、各分野の良さや抱える問題点についても知ってもらう機会ともなっています。

　何より、ひたむきに学ぼうとする医学生と接していると「地域医療はどうあるべきか」ということを考えさせられます。このように私たちも医学生とともに成長させられていると思います。

いろいろな経験を積み多方面から地域医療を考えて欲しい

　この実習で、すぐに西諸地域の医師不足が解消できるわけではありません。しかし、私は『地域医療の実情を知る医師』が多く生まれることが非常に大切だと考えます。

　例えば、将来医師となり大きな病院で勤務することになっても、地域医療の実情がわかる医師がいることで、各地の病院と連携が取りやすくなることなどがあると思います。

　医学生には、これから多くの経験を積み、それぞれ自分が活躍する場で、「地域医療」について考えてもらえるとうれしいです。

小林から医師を目指す２人を紹介

青山（あおやま） 勝治（かつじ） さん
宮崎大学医学部　６年
（細野地区出身）
令和元年５月に地域包括ケア実習を経験

1児のパパとして子育てにも奮闘中

地域医療の現状を実感し医師を志す

　青山さんは、小林高校を卒業後、県外の大学に進学。大学卒業後は宮崎県職員として、小林保健所で環境衛生に関する業務に従事していました。

「その当時は、医師になることなど夢にも思っていませんでした」と話す青山さん。

　しかし、保健所の業務で各病院を回る中、地方の医師不足の現状を知りました。そして、医師である当時の小林保健所長の勧めなどもあり、自分も医師を目指すことを決意。

　それから1年間、仕事と勉強を両立させ、宮崎大学医学部に入学しました。

病院だけではなく地域での活動も体験

　大学病院内の実習を経て今回、西諸地域で実習を経験した青山さん。

「どの病院も限られた医療スタッフの中で、いかに質の高い医療を提供するかを目標に一生懸命頑張っていると感じました」と実習の感想を語ります。

　実習では他にも、認知症支援のオレンジカフェや1歳児健診など、地域活動や介護、保健、福祉の分野も体験しました。

　実習を通して、地域との関わり方を意識した青山さんは「医療は地域活性化の一助となるので将来は地域に役立つ医師として頑張りたい」と抱負を語りました。

山口（やまぐち） 航生（かずき） さん
宮崎大学医学部　５年
（細野地区出身）
令和２年５月に地域包括ケア実習予定

勉強は大変！でもそこが面白い！

自身の体験が医師を目指すきっかけに

　山口さんの医師をめざすきっかけは小学生の頃、病気で入退院を繰り返していた母親への思いでした。

　見舞いのため病院に通うちに「将来は自分が医師になり母の病気を治したい」と思い始めるようになりました。

　中学・高校生の頃には他の進路も考えましたが、最終的には幼い頃の夢を実現するため、宮崎大学医学部に入学しました。

医師となるために学ぶことは尽きない

「大学では学ぶことがたくさんあり大変です」と山口さん。一方で、「勉強するほど自身の知識が深まっていくことが楽しい」と感じているそうです。

実習は患者さんと近い地元で頑張りたい

　地域包括ケア実習では、「大学の講義だけでは学べない患者さんや、他の医療スタッフとの上手なコミュニケーションの取り方なども学びたい」と話す山口さん。5月に地元西諸での実習が始まります。

　「より患者さんと近い地元で地域医療を学べることを楽しみにしています。そして、将来はいろいろな経験を積んで、故郷に貢献できる医師になりたい」と抱負を語りました。